

ISSN 2758-8076

福岡大学  
国際センター紀要  
第1号  
令和4（2022）年度

Vol. 1 (2022)  
The Journal of  
Center for International Programs

福岡大学国際センター

福岡大学 国際センター 紀要 第1号

目 次

I. 巻頭言

福岡大学国際センター紀要と福岡大学の国際化ならびに国際センターの取り組み  
三島 健司・・・・・・・・ 1

II. 研究論文

コロナ禍で海外研修が中止になった学生の潜在意識の変化（BEVI-jの分析から）  
佐々木 有紀、新田 よしみ・・・・・・・・ 2

III. 編集規程および執筆要領・・・・・・・・ 7

## 巻頭言

### 福岡大学国際センター紀要と福岡大学の国際化ならびに国際センターの取り組み

国際センター長 三島 健司

2020年1月より、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大に対応すべく、外務省は新規のVISA発給の停止など種々の対策を講じてきた。それにともない海外からの留学生、海外への留学生派遣など大学の国際交流活動が大きく制限される事態がつづいていた。2021年10月中旬には、日本国内の感染者数は、大きく減少し、日本政府の「緊急事態宣言」も全国的に解除され、国際交流活動再開への世論の要望も強くなりつつある。社会が大学に付託する教育能力として、学生の国際性は、ますます重要となりつつある。18歳人口が減少し、大学進学率が飽和値に近い値となっている2022年度以降は、日本の各大学が激しい競争時代に突入すると想定されている。そのような環境の中で、学生から選ばれる大学として福岡大学が今後も存在し続けるためには、福岡大学の国際化のあり方やその情報発信力も重要となる。

福岡大学国際センターでは、教職員の研究・教育活動および国際交流実践ならびに国際共同研究の成果を発表する場として、「国際センター紀要」を、2022年度から創刊することとした。この紀要により、福岡大学の国際性の情報発信力を高め、学生に選ばれる福岡大学の国際化を実現する一助となることを目指している。この「国際センター紀要」は、国際センターのWebサイト（ホームページ；HP）に掲載し、広く国内外に、福岡大学の国際化をアピールする。

# コロナ禍で海外研修が中止になった学生の潜在意識の変化 (BEVI-j の分析から)

佐々木 有紀\*、新田 よしみ\*\*

## Changes in students' subconscious when their overseas training programs were canceled due to COVID-19. (From the analysis of BEVI-j)

SASAKI Yuki\*, NITTA Yoshimi\*\*

**Abstract:** The spread of COVID-19 has forced the cancelation of overseas training programs across the board. In addition, university life for all students was severely restricted; many classes for the 2020 academic year were held online, depriving students of the opportunities to interact with their friends, engage in club activities, and travel in and out of Japan. This paper will examine how the attitudes of the students whose overseas training programs were canceled have changed over the year.

**Keywords:** BEVI-j, COVID-19, subconsciousness, short-study-abroad

キーワード：BEVI-j、コロナ禍、潜在意識、海外研修

### 1 はじめに

2020年3月13日に新型コロナウイルス対策の特別措置法が成立した。同法に基づき、4月7日に東京をはじめとする7都府県に第1回目の緊急事態宣言が出され、4月16日には対象が全国に拡大された。そして、コロナ禍において、多くの大学では2020年度の留学・海外研修プログラムを中止し、授業も急遽、対面授業に代わってオンライン授業が主流となり、サークル活動や部活動も制限された。

### 2 先行研究

コロナ禍の大学生に対する影響については、まだ、十分な検討が行われていないが、各国の大学生を対象とした調査の結果が発表されはじめている。例えば、アメリカの大学生を対象に面接調査を行った研究では、新型コロナウイルスの流行によって行われたロックダウンや外出禁止等の状況が長引いた結果、大学生たちはストレス・不安・鬱傾向が高くなったことが報告されている(Sons, et al, 2020)。また、中国の大学生を対象とする調査では、勉学の遅れの他に経済状況や日常生活の状況もコロナ禍の大学生の不安を高める要因とな

っていることが指摘された(Cao, et al, 2020)。一方、コロナ禍以前とコロナ禍の外出規制中の学生を比較したスペインの調査では、コロナ禍の規制中の方が学生の学力向上が認められる結果が出ている(Odriozola-Gonzalez, et al, 2020)。このように、大学生に対するコロナ禍のすべての影響が否定的なものではないと思われるが、世界的な感染症の流行により、2020年度は多くの国の大学生が不安を強く感じる年であったと思われる。

コロナ禍の日本の大学生の心理社会的ストレスについての研究を発表した橋本(2021)は、コロナ禍の大学生活や社会の変化によってもたらされた様々な制約が大学生のストレスの要因となっていること、中でも就職活動に関するイベントなどのように大きなライフイベントの中止よりも、日々の学業や生活の中で生じる不便が大きな要因となっていると分析している。橋本(2021)では分析対象としていないが、留学や海外研修も大学生にとっては学生生活における大きな「ライフイベント」であるだろう。そこで本論文では、2020年度に参加が予定されていた海外研修が中止になった大学生の潜在意識の変化を、心理特性の測定ツール

\* 元福岡大学国際センター准教授

\*\* 福岡大学国際センター講師

BEVI-j を用いて測定し、検証する。

### 3 被験者

#### 3.1 福岡大学 Global English (GE) クラスについて

学生の国際化とグローバル意識向上のため、福岡大学では2015年より、2年次共通教育(英語)の目的別クラスの一つとして、Global English (以下GE) クラスを開講した<sup>1)</sup>。これは、プレゼンテーションやスピーキングに特化したIとII、海外研修とその事前準備のための授業で構築されたIIIとIVから成る。

IとIIのクラスは、研修国ごとではなく、同じ学部学科に所属する学生で構成され<sup>2)</sup>、1年間同じ顔触れで授業を受ける。

IIIとIVのクラスは、研修国ごとに構成されている。そのため、他学部や他学年の学生が混在したクラス編成である。授業はコミュニケーション能力向上を目的として、①Interactive English (Teaching Assistant (TA)との協働学習:全6回)、②コミュニケーション能力育成ワークショップ(福岡で活躍する劇団の全面協力のもと、身体表現やボイストレーニングなどを行う:全3回)そして③グローバル対応能力育成ワークショップ(他大学の留学生との1日完結型協働学習)を前期は5月から6月、後期は11月から12月にかけて実施する。その後、学生は3週間の海外研修<sup>3)</sup>に参加する。

#### 3.2 2020年度の学生

2020年度、GEクラスは学部ごとに6クラスが開講された。本研究では、2020年度GEクラス受講生74名のうち、著者らが担当するクラス(GE-2ならびにGE-3<sup>4)</sup>)に在籍する30名を対象とした。

#### 3.3 調査方法及び調査時期

上記の被験者30名は、4月のGEクラス開講時(Test 1、以下T1)、10月(Test 2、以下T2)、そして12月の後期授業終了時期(Test 3、T3)の計3回、BEVI-jに回答した。

## 4 BEVI-Jについて

#### 4.1 BEVI (The Beliefs, Events, Values and Inventory) とは

BEVI (The Beliefs, Events, Values and Inventory) は、1990年代、アメリカの心理学者たちのグループが開発した、心理特性を測定するツールである。2011年から、広島大学西谷元教授を中心に、日本語版(BEVI-j)作成に着手、2016年度から運用を開始した。

BEVIならびにBEVI-jはWebベースのテストである。被験者は最初に年齢や性別、国籍や訪問国、学歴など20項目の背景質問に回答する。その後、185項目の信念・価値または人生の出来事や心理特性に関する質問に答える。「強くそう思う」、「そう思う」、「そう思わない」、「全くそう思わない」の4段階リッカート尺度を採用しているため、被験者は「どちらでもない」といった回答を行うことができないようになっている。質問項目には「表面的妥当性 (Face Validity)」を有しておらず、また正解や難易度も設定されていない。最後に3項目の記述式の質問に回答する。

学生からの回答は、BEVIのアルゴリズムが集計、分析し、17の尺度それぞれに対して学生がどのように分布しているかを100%の割合で提示する。

#### 4.2 福岡大学での運用について

本学では、2019年度よりGEクラス受講生を中心に、BEVI-j (ver.2)を使用し、国内での異文化交流体験や海外研修が学生に与える影響を測定している。

#### 4.3 BEVI-jによって明らかになること

BEVI-jは、学生の内面や心理的な変化を明らかにすることを目指して作成された。例えば、BEVI-jの結果を分析することで、学生の持つ価値観や信念、欲求に対する充足度といった潜在的な部分を可視化することが可能である。本学では、学生が様々なワークショップや海外研修を経験していくことで生じる潜在意識の変化を明らかにするためにBEVI-jを用いている。

#### 4.4 BEVI-jの尺度

BEVIならびにBEVI-jは、以下の表にまとめた通り、7つの領域、17の尺度で測定を行う。

本論文では、特に変化が顕著に表れた尺度3・11・15・17の結果に焦点を当てて分析をおこなう。学生の心理的欲求が、オンライン授業下でどの程度満たされているかを知るために尺度3を、新型コロナウイルスというこれまでとは異なる環境に置かれることで、学生が自己をどう客観視しているかを可視化する尺度11をとりあげる。加えて、学生のグローバル意識の変化を知るべく、尺度15と尺度17に焦点を当てて分析する。とりわけ尺度15と17は、学生のグローバル化を図るうえで重要な項目とされており、これらの変化を見ることで、学生が参加したプログラムの効果を検証・評価することができるものである。

領域	尺度
I 形成的因子 Formative Variables	1. 人生における負の出来事 Negative Life Events
II 中核的欲求の充足 Fulfillment of Core Needs	2. 欲求の抑圧 Needs Closure 3. 欲求の充足 Needs Fulfillment 4. アイデンティティの拡散 Identity Diffusion
III 不均衡の許容 Tolerance of Disequilibrium	5. 基本的な開放性 Basic Openness 6. 自己に対する確信 Self Certitude
IV 批判的思考 Critical Thinking	7. 決定論・必然論的性向 Basic Determinism 8. 社会・情動の理解 Socioemotional Convergence
V 自己の理解・アクセス Self Access	9. 身体への共鳴 Physical Resonance 10. 感情の調整 Emotional Attunement 11. 自己認識 Self Awareness 12. 意味の探求 Meaning Quest
VI 他者の理解・アクセス Other Access	13. 宗教的伝統主義 Religious Traditionalism 14. ジェンダー伝統主義 Gender Traditionalism
VII 世界の理解・アクセス Global Access	15. 社会文化的オープン性 Sociocultural Openness 16. 環境との共鳴 Ecological Resonance 17. 世界との共鳴 Global Resonance

表 1 BEVI-j の尺度

## 5 結果と考察

2020 年度の BEVI-j の T1、T2、T3 の結果を比較し、4 項目（尺度 3・11・15・17）についてまとめたのが図 1 である。学生の心理傾向が外交的か内向的かを図るために、学生の気持ちが外部に向いていることを示す尺度 17 を一番上に、次いで尺度 17 と関連がある尺度 15 を、そして学生の自己認識に関わる尺度 13、最後に学生がコロナ禍においてどれだけ自分の欲求を満たすことができたかを示す尺度 3 を順にグラフ化した。

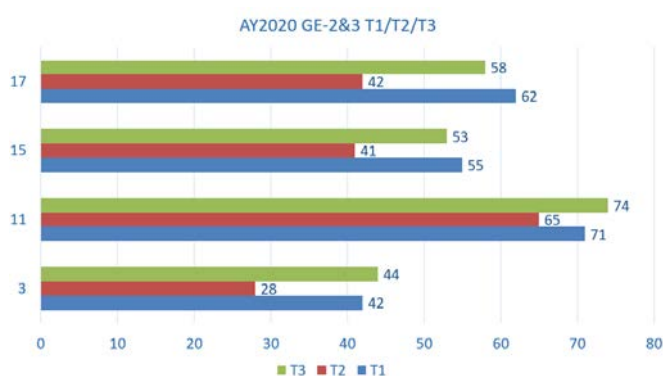


図 1: BEVI-j の結果

(縦軸は 17 の尺度、横軸は 100%として表記)

図 1 が示すように、4 つの項目に共通して、T1 で高い数値を示し、T2 で数値が低下、T3 で再び数値が上昇する傾向が見られた（項目 3 : 44→28→44、項目 11 : 74→65→71、項目 15 : 53→41→55、項目 17 : 58→42→62）。

本研究で対象としたのは、2020 年度に短期海外研修に参加することが決定していた学生である。そのため、もともと海外に出たいという気持ちが強く、英語学習のモチベーションも高かったと考えられ、4 月に実施した T1 で各項目の数値が高かったのは予想通りであった。

しかし、これらの学生がコロナ禍で海外研修が中止になり、また、前期はオンライン授業、部活動やアルバイトの中止で家にこもる生活を続けた結果、後期初めに実施した T2 では欲求の充足、肯定的な自己認識、社会文化的オープン性、世界との共鳴、の 4 項目すべてで数値が下がる結果になったのではないかと考えられる。

その後、後期に入り、対面授業の部分的実施や部活動の再開等、様々な活動が少しずつできるようになっ

たことに加え、海外渡航条件が緩和の方向に向かったことなどから再び、海外志向や自己充足感が回復して、後期最後に行った T3 では、BEVI-j の各項目の数値上昇につながったのではないかとと思われる。

この結果は T3 と同時期に対象 2 クラス中 1 クラス (14 名) で T3 と同じ 12 月に行われた自由記述式のアンケート調査における学生の回答とも一致している。アンケート調査では、「4 月以降生活がどのように変化したか」という問いに対し、ほとんどの学生が 4 月に授業がオンラインになり、緊急事態宣言でアルバイトや部活の機会も減少し、家で過ごす時間が増えたことに言及しており、T1 から T2 にかけての時期は、学生の社会的なつながりが減少し、精神的にも「内向き」になりやすかった状況が読み取れる。一方、その後は社会情勢の変化に伴い、「ようやく 11 月に入って仕事が戻り始め、先日 9 か月ぶりにアルバイト先へ出勤しました」などの報告がなされるようになった。学生たちも社会活動を徐々に再開することができたことにより、「来年以降はもっと部活やボランティア活動に励み、アクティブな大学生活を送りたい」と、将来の学生生活に対し、積極的な姿勢を持てるようになってきた様子がアンケート調査の結果からもうかがえる。

今回の調査は非常に限られた数の被験者の調査結果であるが、BEVI-j の分析により、海外研修に参加する意欲を持った学生たちは自己実現と目標達成に対する意識が高く、広く世界を受け入れようとする潜在意識の傾向を持っていることが示唆された。一方、そのような学生たちもコロナ渦における授業のオンライン化や社会生活の機会の減少、経済的制約などにより積極的な傾向が阻害されてしまったこと、コロナ渦の制限の強化・緩和が潜在意識の変化に影響を与えたことも読み取れた。

## 6 まとめ

現在、新型コロナウイルスの感染状況から多くの地域で活動制限が継続され、海外渡航も難しい状況が続いていることを考慮すると、せっかく回復した学生の意識がまた低下することが懸念される。

これらの状況を鑑みると、コロナ渦で留学や短期海外研修への参加の機会を失った学生の追跡調査を行うなどして潜在意識のさらなる変化を引き続き観察し、海外渡航が厳しい状況の中で意欲のある学生をどのよ

うにサポートしていくのかを追求することが、今後の大きな研究課題だと認識している。

## 注

- [1] 医学部医学科の学生のみ 1 年次生が受講している。
- [2] 医学部医学科 1 年次生は、学年暦の都合上、例年春に実施する海外研修には参加していない。
- [3] 夏の海外研修は 8 月に 3 週間、春の研修は 2 月に 3 週間行う。研修先は、夏研修がイギリス (オックスフォード・ケンブリッジ)、カナダ (バンクーバー)、アメリカ (ボストン・サンタバーバラ)、イタリア (マルタ島)、春研修がアメリカ (ハワイ)、ニュージーランド (オークランド)、オーストラリア (シドニー・ブリスベン) である。
- [4] GE-2 クラスは商学部 2 年生が受講対象のクラスであり、GE-3 は法学部 2 年生が受講対象のクラスである。

## 参考文献

### 本文内引用

1) 橋本剛 (2020). コロナ渦初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討: 社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて. 『静岡大学人文論集』第 71 号 2 巻, 15-34.

2) Cao, W., et al. (2020) The Psychological Impact of the COVID-19 Epidemic on College Students in China. *Psychiatry Research*. 2020.

<https://doi.org/10.1016/j.psychres.2020.112934>

3) Odriozola-Gonzalez, P. et al. (2020). Psychological effects of the COVID-19 outbreak and lockdown among students and workers of a Spanish university. *Psychiatry Res.* 2020 Aug.

<https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/32450409/>

### その他

1) 佐々木有紀・新田よしみ・大津敦史(2018). 「学内外の多様な人材を利用した短期集中型留学前教育に対する受講者の評価—受講アンケートから見えてくるもの」

『LET Kyushu-Okinawa BULLETIN』 18, 57-70.

[https://doi.org/10.24716/letko.18.0\\_57](https://doi.org/10.24716/letko.18.0_57)

2) 佐々木有紀・新田よしみ(2020). 「短期海外研修・事前研修の異文化対応力変化の可視化－福岡大学の事例」『グローバル人材育成教育研究』 8(1), 36-45.

[http://www.j-agce.org/wp-](http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2013/09/201001JAGCE_Journal_8-1.pdf)

[content/uploads/2013/09/201001JAGCE\\_Journal\\_8-1.pdf](http://www.j-agce.org/wp-content/uploads/2013/09/201001JAGCE_Journal_8-1.pdf)

3) 工藤俊郎・青柳達也(2019). 「異文化対応力測定尺度作成の試み」『グローバル人材育成教育研究』 7(1), 30-35.

4) Shealy, Craig N. et al. (2016). *Making Sense of Beliefs and Values: Theory, Research, and Practice*. New York: Springer Publishing Company.

5) Wandschneider E. et al. (2015). The Forum BEVI Project: Applications and Implications for International, Multicultural, and Transformative Learning. *The Interdisciplinary Journal of Study Abroad*, v25, 150-228, Spr 2015.

<https://files.eric.ed.gov/fulltext/EJ1071299.pdf>



### Ⅲ. 編集規程および執筆要領

## 『福岡大学国際センター紀要』編集規程

### 1. 名称

本紀要の日本語名称を『福岡大学国際センター紀要』とし、その英語名称を「The Journal of Center for International Programs」とする。

### 2. 刊行の趣旨

福岡大学国際センター（以下「国際センター」という）に勤務する教職員の研究・教育活動及び国際交流実践並びに国際共同研究の成果を発表する場とし、国際センターウェブサイトを通して広く国内外にアピールすることを目的とする。

### 3. 掲載対象

掲載対象は、以下のものとし、編集委員会が適当と認めたものとする。

- (1) 日本語研究、日本語教育及びその調査・研究、日本文化研究、日本文化教育及びその調査・研究
- (2) 留学生アドバイジングに関わる調査・研究、留学生ニーズ・留学実態に関わる調査・研究
- (3) 高等教育の国際化に関わる調査・研究
- (4) 第二言語習得に関わる調査・研究、多文化交流教育に関わる調査・研究
- (5) 国際共同研究に関わる調査・研究、国際共同シンポジウム・学術ならびに学生交流施策に関わる調査・研究
- (6) その他、編集委員会が適当と認めたもの

### 4. 投稿資格

下記の者の投稿を認めることとする。

- (1) 福岡大学に勤務している教職員（非常勤講師を含む）
- (2) 福岡大学の元教職員（非常勤講師を含む）で、退職して5年以内の者
- (3) 共同執筆者に上記(1)(2)がいる場合
- (4) そのほかに国際センターと連携し、本センターの推進する業務に携わるもので、編集委員会が適当と認めた者

### 5. 原稿の制限

原稿は未公開のものに限る。

### 6. 原稿の種別

- (1) 研究論文
- (2) 調査報告または実践報告
- (3) 研究ノート

### 7. 執筆言語

執筆言語は、日本語又は英語とする。

## 8. 編集委員会

- (1) 本誌の編集にあたっては、編集委員会を設置する。
- (2) 編集委員会は、国際センター長、国際センター長補佐および国際センター運営委員から構成する。

## 9. 査読

編集委員会が選出した 2 名の査読者が査読を担当する。

## 10. 発行回数

発行は年 1 回とする。

## 11. 投稿締切

毎年 11 月末日を締切日とする。

## 12. 原稿の提出

電子媒体による完全原稿の提出を原則とする。

## 13. 校正

校正は、編集委員会のコメントに基づき、執筆者本人が所定の期日までに行う。

## 14. 著作権

本紀要に掲載された論文等の著作権は、著者及び国際センターに帰属するものとする。

国際センターは、掲載原稿を電子的な手段で配布する権利を有するものとする。

ただし、編集委員会に連絡の上、掲載原稿を著者の著作物に掲載することや電子的な手段で公開・配信することは可能とする。その場合、本紀要に掲載されたものであること、号数などを含めて明示するものとする。

なお、本誌は本学国際センター公式ウェブサイトならびに本学機関リポジトリに掲載する。

## 15. 庶務

編集委員会の庶務は国際センター事務室が担当する。

## 16. その他

この編集規程の改廃は、国際センター運営委員会において行う。

附則 この編集規程は、令和 3 年 10 月 1 日から施行する。

## 『福岡大学国際センター紀要』執筆要領

### 1. 原稿の体裁

- (1) 原稿は、A4 版横書きとし、上下左右の余白をそれぞれ 3 センチ取る。
- (2) 使用する文字は、和文の場合は「明朝体」、英文の場合は「Times New Roman」とする。  
文字の大きさは、和文の場合は 10.5 ポイント、一行を 40 字、一頁を 35 行とする。(行と行の間隔は 0 行)。英文の場合は 12 ポイント、一頁の行数を 35 行とする(行と行の間隔は 0 行)。
- (3) 原稿の上限は、研究論文は 20 頁、実践報告は 15 頁、研究ノートは 5 頁程度とする。提出原稿に、研究論文、調査報告・実践報告、研究ノートの種別を明記する。
- (4) 原稿には、和文・英文両方の表題をつける。

### 2. 原稿の構成

#### 2-1. 論文、調査報告・実践報告、研究ノート

- (1) 論文(和文)の場合は、「タイトル、氏名、要約(500 字以内)、キーワード(3~5 語)、本文、注、文献リスト」の順とする。
- (2) 論文(英文)の場合は、「タイトル、氏名、要約(200 字以内)、キーワード(3~5 語)、本文、注、文献リスト」の順とする。
- (3) 実践報告、研究ノートの場合は、和文・英文どちらも「タイトル、氏名、本文、注、文献リスト」の順にする。

#### 2-2. 謝辞や付記

記載する必要がある場合は、文献リストの後に記載する。

### 3. 表題・著者名・所属等

表題は、1 頁目の 1 行目に本文と同じ文字で中央寄りに記載する。副題をつける場合は、ダッシュ(—)ではさむ。

表題から 1 行あけて、著者名を右寄せで書く。著者が複数の場合もすべて同様にする。日本人著者名を英語表記する場合は、姓・名の順序で記述し、姓はすべて大文字、名は頭文字のみ大文字にし、両者の間には「,」をいれない。外国人著者名の英語表記については、Family Name, Given Name の順序で記述し、Family Name はすべて大文字、Given Name は頭文字のみ大文字にし、両者の間には「,」を入れる。共著者も同様。一行あけて、要約(アブストラクト)を始める。

著者名にはアスタリスク(\*)を付し、1 頁目の脚注に所属を記載する。著者が複数の場合は、アスタリスクを増やしていく。(例 \*\*, \*\*\*)。所属の記載方法を以下のとおりとする。

- (1) 福岡大学の教職員の場合は、所属と職階を記載する。(例 福岡大学国際センター講師)
- (2) 福岡大学の非常勤で本務校がある場合は、所属と職階を記載し、( ) 付きで「福岡大学非常勤講師」と記載する。(例 東北大学大学院工学研究科教授(福岡大学非常勤講師))
- (3) 福岡大学の非常勤講師で本務校がない場合は、複数の大学に出講していても「福岡大学非常勤講師」と記載する。
- (4) (1)-(3)に該当していた教職員で、福岡大学を退職して 5 年以内の者については、「元」をつける。(例 元福岡大学工学部教授)ただし、福岡大学の名誉教授の場合は、「福岡大学名誉

教授」と記載する。

(5)福岡大学に勤務していない場合は、所属と職階を記載する。

#### 4. 要約（アブストラクト）キーワード

要約は一つのパラグラフで構成する。余白の取り方は本文と同じ。和文の場合は「要約」、英文の場合は「Abstract」を中央に記載し、行をあけずに書き始める。要約の後、1行あけて本文を書き始める。

論文に関連するキーワードを5つまでアブストラクトの下に記載すること。

#### 5. 本文の構成

執筆者が所属する学会の論文形式に従うこと。本紀要用に特に指定しない。

#### 6. 注・参考文献

注(Notes)は脚注を用いず(一頁目で著者の所属を表すために用いる場合は除く)、文末脚注、参考文献の前にいれる。参考文献は、論文等の最後に和書・洋書共に著者名のアルファベット順に一括してあげる。同一人物の文献は年代順に古い方から記載する。

#### 7. 図表・写真について

投稿者のオリジナルでない図表、写真等を使用する場合は、投稿者が使用許諾を得る。

人物が判別できるような写真を使用する場合は、投稿者が本人の承諾を得る。

表には、和文の場合は「表1」、英文の場合は「Table 1.」のように番号をアラビア数字で表の上に左寄せで記入し、その下の行にタイトルをつける。タイトルの文字は本文と同じ文字を使用する。英文の場合は、各単語を大文字で始め、車体にし、ピリオドをつけない。和文の場合は、斜体にせず、ピリオドをつけない。データを区分するため、水平線は使えるが、垂直線は避ける。

図には、和文の場合は、「図1」、英文の場合は「Figure 1.」のように番号をアラビア数字で図の下に中央寄せで記入し、同じ行にタイトルをつける。英文の場合は、最初の文字だけ大文字にし、ピリオドをつけない。

図や表の前後に1行挿入する。

以上

## 編集

福岡大学国際センター紀要編集委員会

編集委員長 三島 健司 (福岡大学国際センター長 工学部教授)  
編集委員 石井 和仁 (福岡大学国際センター長補佐 人文学部教授)  
孟 志奇 (福岡大学国際センター長補佐 工学部教授)  
佐藤 朝光 (福岡大学国際センター長補佐 薬学部教授)  
新田 よしみ (福岡大学国際センター講師)

福岡大学国際センター紀要

第1号

令和4(2022)年度

発行日 令和5(2023)年3月1日

編集・発行 福岡大学国際センター

〒814-0180

福岡市城南区七隈八丁目19番1号

TEL 092-871-6631 (内線 2163・2164)